

測定器研究チーム

一関で国際会議

技術面の課題協議



国際リニアコライダー（ILC）計画で用いる測定器「ILD」研究チームの国際会議は20日、一関市大手町の一関文化センターで、3日間の日程で始まった。世界的な建設候補地とされる北上山地（北上高地）の地元で、実現に向けた技

術面の課題を協議する。

本県開催は奥州市での2014年以来4年ぶり、日米欧7カ国の63人が参加。開会行事のみ公開され、チーム代表者のドイツ電子シンクロトロン（DESY）のティーズ・ベンケ教授は「欧州の次期素粒子物理戦略（5カ年計画）にILCが位置付けられるように準備する重要な会議となる」と述べた。

参加した東北大学院の

佐賀智行准教授によると、初日は測定器の主要部分の技術などをテーマに研究発表が行われた。今後はILC実験で生じる物理現象の解析性能などを協議するほか、鈴木厚人県立大学長が講演で東北の受け入れ態勢を説明する。

初めて来日したDESYの大学院生ヤコブ・ベイヤーさん(23)は「日本は親切だし、自然も豊か。将来はILCでの研究を望んでおり、一関でぜひ実現してほしい」と期待を高めた。同チームはILC計画を推進する国際研究者組織リニアコライダー・コラボレーション（LCC）に認められた任意組織で、計画実現後は測定器研究の中心的な役割を担う。